



# 日本の詩歌

5

石川啄木

中央公論社

---

石川啄木

昭和42年10月16日初版発行  
昭和46年5月20日8版発行

---

発行者 山越 豊

本文製版印刷 三見印刷株式会社  
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社  
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
函ボール 佐賀板紙株式会社  
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

一握の砂	5
悲しき玩具	140
短歌拾遺	195
あこがれ	238
黄草集	292
ハコダテの歌	316
泣くよりも	325
流木	335
今聞ゆ	344
心の姿の研究 他	358

詩六章

呼子と口笛

はてしなき議論の後

詩人の肖像

鑑賞

年譜

校訂について

367

375

390

伊藤 整

山本健吉

岩城之徳

石川啄木



# 一握の砂

函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるもの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。

また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の菓餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来出するところ相違きをたづねて仮にわかつてのみ。「秋風のこころよき」は明治四十一年秋の記念なり。

明治四十三年十二月、東雲堂から刊行。四十一年夏からの短歌五百五十一首を収め、ことに四十三年の歌が八割以上に及んでいる。

当時朝日新聞の社会部長で、啄木の歌を激賞し、大いに激励した渋川玄耳（藪野樟十郎）が序文を寄せた。

この年の春、歌集を出そうと思つて歌を選んだときは、「仕事の後」と名づけられた。長らく歌から気持が遠ざかっていたのに、爆発的に歌興が湧いて多作したのは、四十一年六月二十三日夜中から、十五日へかけてのことだった。その中には歌集の巻頭吟「東海の」もはいつていた。その月から十月までの歌稿ノートを、彼は「暇ナ時」と名づけた。後年の啄木調はここに胚胎したので、題字の運び方に、一貫した彼の気持、つまり短歌を第二義的な不要のもてあそびものとする考えが見える。

## 我を愛する歌

東海のこじまの小島の磯いその白砂しらなに

われ泣きぬれて

蟹かにとたはむる

頬ほにつたふ

なみだのごはず

一握いちあくの砂を示しし人を忘れず

大海たいかいにむかひて一人

七八日ななつか

泣きなむとすと家を出でにき

「我を愛する歌」百五十一首。自分のいのちをいとおしんだ折々の歌ということ。「おれはいのちを要するから歌を作る。おれ自身か何よりも可愛いから歌を作る。」「利己主義者と友人との対話」。「何よりもおのれを愛し生くといふさびしきことにあきはてにけり」(明治四十三年十月作)。大部分は明治四十三年の歌。

「東海の」以下十首。砂浜を背景にした作で、函館の大森浜のイメージが根底にある。「友と相携えて大森の砂浜を行くに、北海の磯の香は強くして高し。砂をとって仔細に見、心常に人生を思う」(「ハコダテの歌」はしがき)。だが「東海の小島の磯」とは、要するに架空の場所であり、「海東の君子国」、野日本次郎の詩集「東海より」の東海、日本という小さな貧しい島国である。北海流離の

いたく錆びしピストル出でぬ  
砂山の

砂を指もて掘りてありしに

ひと夜さに嵐米りて築きたる

この砂山は

何の墓ぞも

砂山の砂に腹這ひ

初恋の

いたみを遠くおもひ出づる日

砂山の裾によこたはる流木に

あたり見まはし

物言ひてみる

悲愁に、大海を前にした自分という存在の卑小感が重なってくる。

「頼につたふ」の歌は、題名「一握の砂」とモチーフの上で関連がある。自分の作る歌を、「握の砂」のようにはかなくも空しくかなしいものと考えているのだ。「人はだれでも、その時が過ぎてしまえばまもなく忘れるような、ないしは長く忘れずにいるにしても、それを言い出すにはあまり接聴がなくてとうとう一生言い出さずじまうというような、内から外からの数限りなき感じを、あとからあとからとつねに経験している、多くの人はそれを軽蔑している。軽蔑しないまでもほとんど無関心にエスケープしている。しかしのちを愛する者はそれを軽蔑するることができない」（『一利己主義者と友人との対話』。次ページ「いのちなき」の歌参照）。

「いたく錆びし」の歌は明治四十

いのちなき砂のかなしさを  
さらさらと

握れば指のあひだより落つ

しつとりと

なみだを吸へる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな

大といふ字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰り来れり

目さまして猶なほ起たき出でぬ兒この癖くせは

かなしき癖くせぞ

母ははよ咎とがむな

二年五月「スバル」の「莫復問なほたずとこ」  
六十九首の一。そのころ啄木は、  
短歌に情熱を失っていた。歌会の  
席でも、みずからへなぶりと称し  
たふどけた歌を作った。芝居気も  
あったが、死を思うことも多く、  
なにか冗談の中から、真実の感情  
がちらつくようになった。「ふと、  
今まで笑っていたような事柄が、  
すべて、急に、笑うことができな  
くなったような心持になった」  
(「食うべき時」)。結局彼のへなぶ  
り調が、彼の短歌から虚飾の多い  
新詩社風の出染を洗い落し、人生  
の真実、真の詩の脈脈を描り当て  
させたのである。このピストルの  
歌のごとき、芝居気たっぷりのふ  
ざけ半分の中から、半面の真実が  
顔を出しているようである。もち  
ろく、この歌は虚構である。

ひと塊くわいの土つちに延のびし

泣く母の肖せう顔がんつくりぬ

かなしくもあるか

燈影かげなき室むろに我あり

父と母

壁かべのなかより杖つゑつきて出づ

たはむれに母を背負ひて

そのあまり軽かろきに泣きて

三步あゆまず

飄然へうぜんと家を出でては

飄然と帰りし癖よ

友はわらへど

「燈影なき」は「たはむれに」などの歌は、前出「東海の」「頼につたふ」の歌などとともに、明治四十一年六月二十三日夜半から翌日、翌々日へかけて、興に乗って作った百數十首の中にある。その歌篇は鉄幹に送られ、「明星」七月月号に、「石破集」(二五ページ)と題して発表された。在来の新詩社風の豪歌が多いが、その中に、これまでの啄木の歌に見られなかつた平明率直な詠みぶりの歌があった。それらが拾われて、歌集『一握の砂』の所々にばらまかれているのである。

「飄然と」の歌 初案「飄然と国を出でては飄然と帰りたること既に一度」(「石破集」)

このあたり、父母を思う歌が並べられている。父は青森県野辺地に、母や妻子は函館の宮崎郁雨の

ふるさとの父の咳する度に斯く  
咳の出づるや  
病めばはかなし

わが泣くを少女等きかば  
病犬の

月に吠ゆるに似たりといふらむ

何処やらむかすかに虫のなくごとき

こころ細さを  
今日もおぼゆる

いと暗き

穴に心を吸はれゆくごとく思ひて  
つかれて眠る

貸家である市内栄町の鈴木弥吉方に寄寓し、啄木ひとり東京に出て、家族を迎える能力のない自分に焦慮していた。

「ふるさとの」の歌。初案「ふるさとの父の咳する度にわれかく咳すると病みて聞く床」（『石破集』）  
「わが泣くを」の歌。月に向って吠える犬のように、泣くことは空しい行為なのである。萩原朔太郎に詩集『月に吠える』がある。

啄木の歌には比喩を使うことが多い。「何処やらむかすかに虫のなくごとき／こころ細さ」「いと暗き／穴に心を吸はれゆくごとく思ひて」など、意識の暗く重い一点についての比喩表現の繊細さ、妥当さが、これらの歌のすべてだと言ってもよい。

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

こみ合へる電車の隅に

ちぢこまる

ゆふべゆふべの我のいとしさ

浅草の夜のにぎはひに

まぎれ入り

まぎれ出で来しさびしき心

愛犬の耳斬りてみぬ

あはれこれも

物に倦みたる心にかあらむ

「浅草の」の歌は明治四十三年三月作。浅草の六区、千束町、十二階下（六ページ）を彷徨して、頓唐気分をひたつたのは、四十一年末から四十二年春へかけてである。だがこの歌は、必ずしも彼がみずから「塔下苑」と名づけた私娼窟の女たちのもとへ通つたそのころの荒廃した気持ではなく、ふと足を向けて群衆の中に自分を没したさびしさを詠んだものである。群衆の中の孤独を「さびしき心」と言つた。

「愛犬の」の歌は明治四十二年五月発表。これもへなぶり調の嘘なのだが、その芝居気たつぷりな嘘に、ある心理的な真実がにじみ出ている。

鏡とり

能ふかぎりのさまさまの顔をしてみぬ

泣き飽きし時

なみだなみだ

不思議なるかな

それをもて洗へば心戯けたくなれり

呆れたる母の言葉に

気がつけば

茶碗を箸もて敲きてありき

草に臥て

おもふことなし

わが額に糞して鳥は空に遊べり

「鏡とり」の歌以下、明治四十二年の歌が続く。四月末に北海道から上京して、五月四日、友人金田一京助の下宿にころがりこみ、小説家として立とうとするが、彼の書くものは文壇の受けいれるところとならない。極度の生活苦の中に、虚無的な心の翳を深くしていった。彼の泣き笑いの表情が、「鏡とり」「なみだなみだ」の二首には出ている。

「呆れたる」の歌は明治四十二年五月発表。父母、妻子が上京して、本郷弓町の床屋「喜之床」の二階を借りて同居したのは六月のこと。だからこれは、昔の回想の歌である。茶碗を箸でたたく（箸太鼓をたたく）と地獄の餓鬼がのぞくと、昔の人は言つて子供たちを成めたものである。

わが髭ひげの

下向く癖がいきどほろし

このごろ憎き男に似たれば

森の奥より銃声聞ゆ

あはれあはれ

自ら死ぬる音おとのよろしさ

大木の幹に耳あて

小半日こはんいち

堅き皮をばむしりてありき

「さばかりの事に死ぬるや」

「さばかりの事に生くるや」

止せ止せ問答よ

「わが髭の」の歌以下、明治四十二年作が四首続いている。へなぶり調の中にさぐり当てた人生感情の真実が、これらの歌にはある。

「森の奥より」は死と戯れたおどけ歌。みずからピストル自殺する情景を想像して、その銃声にさわやかさ、いさぎよさを聞き取っているのだ。

「さばかりの」の歌。新詩社の短歌には、このような問答調の試みが多かった。しばしば自殺の誘惑に引きずりこまれようとした啄木の、ウィットに富んだ心の中の問答と見てよい。

まれにある

この平なる心には

時計の鳴るもおもしろく聴く

ふと深き怖れを覚え

ちつとして

やがて静かに臍をまさぐる

高山のいただきに登り

なにがなしに帽子をふりて

下り来しかな

何処やらに沢山の人があらそひて

鬮引くごとし

われも引きたし

「高山の」の歌について、若山牧水は「何という人なつこい寂寥ぞ、私はとある見も知らぬ高山の絶頂からつと燃え立ってすぐ消え去つた冷たい頬を風に吹かせて降りて来る若かりし彼をまごまごと思い浮かべる」（『石川啄木君の歌』）と述べている。また釈道空は「最初読んだ当時、なるほどそうに違いない、しかし我々は表現しようとしなかつたものがとらえられている。そう感じたものだ。つまり啄木が、新しい発見をしたのだ、心の底にひそんでいる微動を捉えることができたのだと、おどろいたものだ」（『短歌論』）と言っている。

「何処やらに」の歌についても、牧水は「いかにも不安な、おちつかぬ、むしろ気味の悪い印象をこの一首から受ける」（『石川啄木君の歌』）と言っている。